

# スピノザにおける「感謝」の観念

浅野 章

日本大学大学院総合社会情報研究科

## On Ideas of 'Gratitudo' in Spinoza

ASANO Akira

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

'Gratitudo', highly praised by Descartes, not to speak of among the common people in general, was not evaluated at all by young Spinoza, who had studied the Cartesian theory and been stimulated his originality. After his excommunication in 1656, Spinoza (1632-1677) lived first with his friends of the (Christian) Collegiant group and taught his own thought of which manuscripts were discovered and published in 1862 under the title of the oldest of them: *Korte Verhandeling van God, den Mensch en des zelfs Welstand* (*Short Treatise on God, Man, and His Well-being*). In his lifework written in Latin the *Ethica More Geometrico Demonstrata* (*Ethics Demonstrated in the Geometrical Manner*), however, Spinoza admitted the idea of 'gratitudo' as a true ethical value saying that liberal men only can be most grateful each other. This paper handles such a new development of his ethical view.

---

### はじめに

スピノザの哲学は、若年の頃より晩年に到るまで殆ど変わることはなかったが、その評価は、生前はもとより、死後において、これほど変転の著しいものはないと言われる。また、デカルトの模倣に過ぎないとされる半面、その思想的背景あるいは土壌を培ったのは、複雑多様であると言われている。更に、スピノザの哲学体系は、ひどく簡単で概してわかりやすい、と評する哲学者がいるかと思うと、その思想は暗号によって表現されている、としてこれを読解しようとする哲学研究者もいる。スピノザ哲学は、いわば実体の如きもので諸々の研究は、その様態の様相を呈しているのかもしれない。

本稿は、感謝の観念に注目して、スピノザの思想の一端を考察しようとするものである。

スピノザと感謝、一見唐突に見える課題が、何故問われるのか、先ず問題の提起について触れ、スピノザの思想のうちで著しい変貌を遂げたと思われる感謝の観念を、スピノザの初期の思想を示す貴重な資料に基づいて明らかにし、生涯をかけて完成された大作、『エチカ』における、思想的転換の契機をなす忘恩について考察することによって、『エチカ』における感謝の観念

への必然性を暗示し、スピノザの哲学体系における感謝の観念の位置づけを、試みようとするものである。問うものは問われており、問われている経過を略述したが、問うものを問うているものもまた、問われていることには変わりはない。哲学は背進的歩みであり、第一原因への溯及的運動でもある。問いの発端を記すこととする。

### 1 問題の提起

Caute (用心せよ)、と刻んだ印章を自筆の書簡を閉じる時に、スピノザは用いることがあったといわれる<sup>i</sup>。このラテン語 (カウテ) は、また、指輪にも彫刻されていた、と伝えられている<sup>ii</sup>。

『神・人間及び人間の幸福に関する短論文』(*Korte Verhandeling van God, de Mensch en des zelfs Welstand*)、

---

<sup>i</sup> 『スピノザ往復書簡集』 畠中尚志訳、岩波文庫 (1972)、428 ページ。ゲープハルト『スピノザ』 豊川昇訳、創玄社(1949)、112 ページ。ゲープハルトはスピノザを武装せる聖者の一人とよぶ。

<sup>ii</sup> イルミヤフ・ヨベル『異端の系譜』 小岸昭ほか訳、人文書院(1998)、53,54,239 ページ。

一般に『短論文』(*Korte Verhandeling*, 1925)<sup>i</sup>と略称されている自分の著作を与えるに際しても、スピノザは弟子たちに対して細心の注意を払うことを求めている<sup>ii</sup>。何故、スピノザはこのように自分自身に対してはもとより、スピノザの思想に親しんでいる友人たちに対しても、スピノザの思想が外部に漏れることに、用心深く慎重であることを望んでいたのであろうか。

スピノザ (Baruch de Spinoza 1632-77) は、生涯、社会の前面に出ることを望まず、ひっそりと屋根裏を住まいとして、レンズを磨く業に携わりながら、その業さながらに、自らの哲学体系をこつこつと磨き上げていった、という言い伝えはさておき、自らの学説をもって世におもねる気は毛頭なく、挑発的にとられることを恐れながらも、それにいささかもたじろぐことはなかった。

慎重の上に慎重を期して出版された『神学政治論』(*Tractatus Theologico Politicus*, 1670) はそれにもかかわらず、轟々たる非難を巻き起こし、死後においてさえ、なお、墓に唾吐きかけよ、と酷評され、文字通り唾棄された。恐るべき無神論者という封印を貼られ、一世紀近く黙殺されていた。

啓蒙主義からロマン主義の興隆によるドイツの思想界において、スピノザは不死鳥のように蘇り、一大旋風を巻き起こすに至る。スピノザを知らざるものは哲学の門に入ることを得ず、と言っても過言ではないほどの最高の評価さえなされるようになった。特にドイツ観念論に与えた影響は大きく、ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831) の言葉は余りに有名である<sup>iii</sup>。

<sup>i</sup> (17世紀のやや古形なオランダ語で書かれたものが現在残っている。資料発見などの詳細に付いては訳書の解説参照。1925年版についても同じ。)

<sup>ii</sup> スピノザ『神・人間及び人間の幸福に関する短論文』畠中尚志訳、岩波文庫(1960)、(以下『短論文』と略称)、209ページ。

<sup>iii</sup> 「ひとが始めて哲学せんとすれば、先ず以てスピノザ主義をもって立たねばならぬ。」  
(Wenn man anfängt zu philophiren, so muss man zuerst Spinozist sein.)

(ヘーゲル『近世哲学史』上、上田泰治訳、世界文学社(1948)、141ページ。これはその一例である。)

Benedictus でなく Maledictus<sup>iv</sup> であるという誹謗から名誉を回復したとはいえ、また名誉の回復は歴史の進展による人類社会あるいは人間の思想の変遷によるとはいえ、スピノザの思想がそのことによって容易に理解されるようになった、とは必ずしも言うことは出来ない。その理由を考えることは、スピノザの思想を理解する上において極めて重要である。

ここにその一例として「感謝」の問題を取り上げようと思う。感謝について、スピノザの考え方の異常さを探ろうというのではなく、スピノザの著作に即して初期から後期に至るスピノザの説く感謝の観念の変貌をたずね、スピノザの哲学体系における位置付けを試みようとするものである。

当然起こる疑問であるが、何故「感謝」を取り上げるか、問題提起の理由である。理由は簡単であるというより素朴である。感謝は古今東西を問わず、人間にとって普遍的に見られる現象であり、人間存在が根底において、応答的存在であるところより発しているものと思われる。人間は間柄的存在であり、共同存在である。応答を全く欠いた間柄、あるいは共同などというものを想像することは出来ない。感謝は、人間存在が根源的に有限であり受動であることの承認であり、受動から能動へと積極的に生を転換するところに、体得され実行される。感謝は肯定的人生観の上に成り立っている。否定から肯定へのダイナミズムのうちに感謝は深く感得される。

このような人間観とスピノザの思想、それは決定論、機械論などと呼ばれている自然必然性を強調する思想であるが、そのような思想と感謝とは、どのように関わるか、という素朴な疑問から発している。疑問は素朴であるが、倫理・宗教と深く関わる問題でもある。さらに、異端の思想の持ち主にして、常に世間に対して、油断怠りなかった哲学者にとって、感謝とは如何なる

<sup>iv</sup> スピノザの呼称：祝福されたものの意(ポルトガル語 Bento, ヘブライ語 Baruch, ラテン語 Benedictus.)、破門後は Benedictus と自称。スピノザをその内の一人に数えた『三大欺瞞者』(*De Tribus Impostoribus Magnis*, 1700)の著者であるキールの神学者クリスチャン・コルトホルト (Chr. Kortholt) は、これに対して、呪われた者 (Maledictus) と当てつけに呼び、その学説には棘 (spinosa) があると云った。

ものであったのか、問いとして自ずから提起されてくる。

初期の作品と目される『短論文』に着目することから、提起された問いに応えていくこととしよう。

『短論文』は、スピノザが「破門」という形でユダヤ教会を去り(1656)、同族からも離れて、なおアムステルダム、あるいは近郊のアウデルケルク<sup>i</sup>で、ひそかに、コレギアント派<sup>ii</sup>の仲間たちと過ごした数年の一時期、この時期は、スピノザの生涯のうちで詳細は不明であるとされているが、スピノザの思想発展の上において、また学問研究の上において、もっとも重要であったとみなされている。『短論文』はこの時期に形成され、口授され、著述されたと考証されている。

若き日のスピノザの感謝の観念を、『短論文』において訊ねることとしよう。

## 2 『短論文』における「感謝」の観念

デカルトは感謝について、美德であると述べている(『情念論』*Les passions de l'âme*, 1649)<sup>iii</sup>。一般の見解と変わるところはない。

『短論文』におけるスピノザの考え方はどうか。

『短論文』第二部「人間並びに人間に属するものについて」の第十三章「行為、感謝及び忘恩について。歎きについて。」において、スピノザは「更に進んで好意(Gunst)、感謝(Dankbaarheid)及び忘恩(Ondankbaarheid)について」考察すると述べ、「最初の二つに関して言えば、それは隣人に対して何らかの善を望み或いは行おうとする精神の傾向である<sup>iv</sup>、と記している。「更に進んで」と言うのは前の十二章が、名誉(Eere)、恥辱

(Beschaamtheit)、無恥(Onbeschaamtheit)を扱ったことによる。これらの感情は感謝と関わりがあり、感謝についての考察項目の直前の章に置かれていることは、感情論の構成が系統立てられていることを思わせる。差し当たりそれはさて置き、「好意、感謝」が「隣人に対して何らかの善を望み行おうとする精神の傾向」である、とは好意については言えるにしても感謝については適切ではないように思われる。感謝というより親切であろう。語の適切な使用を欠いていると言うべきであろうか。更にスピノザの説明を聞くこととする。「望む」とスピノザが言うのは他人に何らかの善をなした人に善が仕返される場合であり、「行う」というのは我々自身が何らかの善を獲得し受容した場合である、と説明されている。この説明は感謝については適切であるが、好意については適切でないように思われる。「最初の二つに関して言へば」、として好意と感謝とを明確に分けていないところに問題がある。後年、『エチカ』においては、それぞれ定義を異にしているが、今は『短論文』に則して考察することとする。「望み」は、いわば返報としての感謝であり、「行う」というのは、受容としての感謝(感謝の念をもって受け取ることを指すものと解しておく。このような感謝に関する説明は、感謝を美德とするデカルトと異なるところはなく、一般の見解とも一致する。しかし、スピノザの感謝の説明は、一般の見解と異ならないが、評価は著しく異なる。

「殆どすべての人がこれらの感情を善と考えていることを私はよく知っている。しかしそれにもかかわらず私は、それが完全な人間には決して生じ得ないことを敢えて主張する。」<sup>v</sup>

『短論文』における、スピノザ独自の感謝に関する考え方は、この一節のうちに尽くされている。「それにもかかわらず」、スピノザは、「敢えて主張する」と言う。デカルト説との相違は明白である。スピノザにとって感謝は美德ではない。美德ではないにしても消極的な価値の善としては認めるのであろうか。スピノザの驚くべき発言がこれを否定する。すなわち「その隣人を神の故に愛するのでないときに好意と感謝が、生ずるのである」<sup>vi</sup>、というのである。一読一瞬、眼を疑わしめ

<sup>i</sup> Ouderkerk:ポルトガル人の共同墓地がある。スピノザの両親の墓もあり、訪れる研究者も少なくない。

<sup>ii</sup> 聖書を自由に討議する Collegium (団体)、ドルトレヒトの宗教会議(1619)後、正統カルヴィニズムに対する各宗派により構成されており、牧師を置くことを禁ぜられていた。祈りにおいても神秘的靈感を尊重していた。本拠地はレインスブルフ村(ライデン近郊)。

<sup>iii</sup> 感謝については、「情念論」(『デカルト著作集』3、三輪正ほか訳、白水社、(1973)、267-268 ページ、好意と忘恩については、267-268 ページ)参照。

<sup>iv</sup> 『短論文』、152 ページ。

<sup>v</sup> 同上。

<sup>vi</sup> 同上、155 ページ。

る。「神の故に愛するとき」の誤りではないのかと。感謝についてはもとより、スピノザの抱く隣人愛の観念そのものが問われる。『短論文』の編集に当たったとみなされているヤーラッハ・イエレス(Jarig.. Jelles、? -1683)は真正なキリスト教徒であり、信仰を堅持していた、と評される。イエレスに、この点すなわち感謝の全面的徹底的否定は、問題とならなかったのであろうか。(『短論文』の注には編集者によると見られるものがあり、スピノザの説を批判している箇所もある)<sup>i</sup>。

感謝が、完全な人には決して生ずることがない理由を、スピノザは「完全な人間は単に必然性に依つてのみその隣人を助けるように動かされ、他の何らの原因に依つても動かされることはない。」<sup>ii</sup>と述べている。隣人を助けるのは、単なる必然性によるのであるから、最も邪悪な人間であっても、完全な人は助けなければならないと感ずるのであり、どれほど邪悪な人でも、不幸と困苦が大きければ大きいほど益々助けなければならないという感じが強くなる、と説明している。

この説明から完全な人の抱く隣人愛を推測するのはそれほど難しくはないように思われる。その動機は全く純粹であり、何らの見返りも期待することなく、ひたすら助けたいという純粹な気持ちに動かされてのことといえるであろう。如何にも完全な人という印象を与える。どこか孟子の惻隱の心、あるいはカントの善意思を思わせないでもないが、スピノザの説くところはやはりスピノザ独自のものである。神の故に助けようとするのがスピノザの言う完全な人の隣人愛である。神の故にというのは神を原因としているということである。神を原因としていない愛から感謝が生ずるのであり、そのような感謝は完全な人には生じない。その理由は「善及び悪の基礎は、愛が向けられる客体に依存する」<sup>iii</sup>からであり、完全な人は悪の基礎、すなわちそこから悪が生ずる客体を愛するということはないのである。したがって、神を原因としていない感謝、殆どすべての人によって善とみなされている、とスピノザは考えているのであるが、そのような感謝は悪であるということになる。それは悪が生ずる客体を愛し

たからであり、本性上可滅的であるところのものを愛したことによる。可滅的なものへの愛から必然的に憎みあるいは悲しみなどの悪しき感情が生じてくる。スピノザの説明を待つまでもなく、可滅的なものは偶然の支配を免れず、移ろいやすく変わりやすく、破壊され遂には滅する。愛するものを奪われると憎みが生じ、失うと悲しみが生ずる。神を客体とする愛は恒常的であり、破滅することはなく、奪われることはなく、失うこともない。神を原因とする愛は真の認識より生ずる。愛とは客体との合一であるから神を客体とする愛は神の神自身に対する愛ということになる。『短論文』に説かれている最も完全な人の隣人愛はこのような愛であると考えることができる。したがって可滅的な客体への愛である感謝は真の認識からではなく混乱した認識である臆見から生ずる感情であり、完全な人からは生ずることはなく、神とは関わりのない愛ということになる。なお、感謝に関連してスピノザが参考に挙げている、邪悪な人への援助にしても、客体としての邪悪な人ではなく、客体としては神への愛すなわち真の認識に基づく援助であることは断るまでもない。したがってその援助は感情に起因するものではない。すなわち憐れみからではない。「常時普遍であり且つ普遍に止まるところの神を愛するにいたれば、感情の沼に陥ることは不可能である」<sup>iv</sup>。

スピノザの哲学は解脱を説き救済を目的としているといわれる。略称『短論文』の本来の名称『神・人間及び人間の幸福に関する短論文』は端的にそれを表示していると言えるであろう。悲惨な人間の不幸の根源は、悪しき感情にあり、悪しき感情からの解脱のうちにこそ人間の幸福の鍵がある。救済は解脱によって達成される。認識は感情に先立つ。それが『短論文』においてスピノザの説くところである。

『短論文』においてスピノザの主張する感謝は、悪であるとみなさざるを得なかった、敢えてデカルトを持ち出すまでもなく、感謝は美德であり一般に善であると認められている。一般に善であるものを悪であると論じ決定する。スピノザ自ら自説について、奇異と受け取られることを認め『短論文』を結ぶに当たって、くれぐれも警戒を怠らないようにと訴えている。もと

<sup>i</sup> 同上、28-29,105-106,172-173 ページ、参照。

<sup>ii</sup> 同上、152 ページ。

<sup>iii</sup> 同上、155 ページ。

<sup>iv</sup> 同上。

よりこの訴えが主に神についてであり、完全な人に関するものではないにしても、感謝についてのスピノザ独自の考えもまた、そのような警戒を呼び起こす一要因となりうるであろう。この点について、コレギアント派の会員たち、特にメンノウ派に属していたイエレスの考えに関心がもたれる。しかし『短論文』に関する限りそれに触れている箇所はない。感謝は一体スピノザにとって一言うまでもなく『短論文』においてであるが一全面的に悪とみなさざるを得ないものなのであるうか。『短論文』に即してさらに論及することとする。

### 3 忘恩について

感謝が全面的に悪であると採られることを防止するかのように、感謝を論じた直後に、スピノザは忘恩について述べている<sup>i</sup>。もっとも、『短論文』の論述の過程より当然問題になるのは、感謝が生ずることのない完全な人は、一般の人にとって感謝しなければならぬとみなされる事態に立ち至ったとき、どのような行為をするのか、という問いである。一般の立場からすると、このような事態において感謝しないということは、忘恩として非難される。完全な人をこの非難から免れさせるためには忘恩について論じないわけにはいなくなる。忘恩について、スピノザは次のように述べている。

「忘恩は、無恥が恥辱の軽蔑であるように感謝の軽蔑である。しかもそれは何ら理性的根拠なしに、たんに貪欲あるいは過度の自己愛の結果としてである。したがってそれは完全な人間には起こりえない。」<sup>ii</sup>

感謝は完全な人には生じないが、忘恩もまた起こることはあり得ない。スピノザの説く完全な人には感謝はなく忘恩もない。感謝もなく忘恩もない人間を完全な人間と言う。感謝すべき状態にあって感謝が生じない。

完全な人にとって感謝は悪である。悪は否定されねばならない。悪の否定は善によって動かされている。感謝の否定は忘恩である。故に忘恩は善である。この結論は、常識に反する。常識では善とみなされている感謝を、

悪とするスピノザにとって、論理的結論が常識に反するからと言って意に介するとは思われない。しかしスピノザの説く完全な人もまた常識と同じように忘恩を悪とする。すなわち常識に反するのが論理的結論であるにも関わらず、常識を肯定するところに問いの起こる理由がある。問題は、前提にあるのか、結論にあるのか、推論にあるのか、繁をいとわず考察を進めることとする。

先ず結論に着目する。

貪欲と過度の自己愛が理性的根拠なしに結果する忘恩は完全な人には起こり得ない、と言う説明はそのまま首肯される。親切心からなされたことに対して、これを不足として不満に感じ感謝の念をもたないのが貪欲であり、感謝することは負い目の承認であるとして、これを無視あるいは拒絶し、更に受容は望まずより多く与えることを欲する、つまり感謝することは望まないが感謝されることを欲するのは過度の自己愛である。要するに忘恩は完全な人にとって悪であり、悪としての忘恩は完全な人にはあり得ない。更に重要な点は、忘恩は感謝の軽蔑から生じていると言う指摘である。忘恩は感謝の軽蔑の結果であり、それは悪であるから完全な人には起こり得ない。と言うことは、感謝は善であると言う前提にしたがっている。これは明らかに矛盾である。理性的根拠の問題はあるにしても忘恩のみに限定する限り内容に問題はない。この矛盾の意味するものは何であろうか。感謝の否定である忘恩を明るみに出すことによって隠されていた感謝もまたその全容を現そうとしているのであろうか。あるいは感謝の否定である忘恩を否定することによって、否定の否定によって真の感謝が立ち現れてくるのであろうか。

忘恩の否定は感謝の肯定である。忘恩を否定した完全な人は、しかし感謝を肯定しようとはしない。感謝は神に依らない隣人愛から生ずるのであって、神による愛のみに生きる完全な人には起こり得ない、とスピノザは説いている。それのみではなく、感謝の否定である忘恩もまた完全な人には起こり得ない。と言うことは、本来完全な人には感謝も忘恩も関わりのない事柄に過ぎないということになるのではないであろうか。感謝あつての忘恩であつてみれば、すなわち感謝の欠如態が忘恩であつてみれば当然であり、感謝が問題にならなければ忘恩については問いの生じようがない。完全

<sup>i</sup> デカルト『情念論』に従っているが、スピノザ独自の意味を持っているのは興味深い。

<sup>ii</sup> 『短論文』、152 ページ。

な人には忘恩は起こりえないと断りながらも、忘恩について論及せざるを得なかったところに、この問題のもつ複雑さがある。

これまでの検討で感謝が悪であるという前提は誤りであることを指摘してきたが、そのことから直ちに感謝は善であり、忘恩は悪である、と断定するわけにいかない。推論の慎重さが求められる。すべての忘恩が悪であるとは限らない。忘恩には否定的な面があるとともに肯定的な面がある。

感謝についても同様に肯定的な面と否定的な面がある。『短論文』でスピノザが論じている感謝は、スピノザが理想としている感謝、すなわち完全な人にとっての感謝は全面的に否定的に見える。しかしそれが徹底していないことは、感謝の否定である忘恩を否定しようとして、端無くも感謝を肯定せざるを得なかったところに現れている。もとより完全な人に忘恩が生じないが故に、完全な人は感謝的であると断定は出来ず、またスピノザもそのように明言してはいない。明言していないどころか次章において、神に依らない隣人愛から感謝が生ずる、として感謝の善であることを否定した。善の否定は悪の肯定を意味する。神に依らない隣人愛は、可滅的な客体への愛であり、悪しき感情であり、悪である。完全な人には決して生ずることはない。『短論文』においてスピノザの断言するところである。断言にも拘わらずスピノザの若き日の感謝説は重大な欠陥を蔵している、と言わざるを得ないものがある。たとえ完全な人が感謝について、感謝が生じないが故に善悪無記であるとしても、感謝すべき状況に立たされた場合どのように応答するのか。感謝の本質に関わる問いである。確かに忘恩に言及し、完全な人には忘恩は起こり得ないとして、窮状を切り抜けているように見える。しかし応答すべき状況において、忘恩が起こらなかったということは何を意味しているのか。そのような状態を指示する名辞、あるいは意味を表現する言葉は何であるのか。スピノザはこれに答えようとは

しない。感謝の否定である忘恩の否定によって感謝はその真の相を現そうとしたが、スピノザはこれを無視した。好意あるいは感謝の例として邪悪な人の救助を挙げているが、感謝については、邪悪な人と完全な人との立場を逆にして論じたほうが印象深く説得力もあつ

たであろう。邪悪な人に救われた完全な人の、邪悪な人に対する応答のうちに、完全な人の感謝の観念が明示されるからである。

もつとも、スピノザの立場からは取り上げるまでもない例示が指摘されていると見ることもできる。

完全な人の愛は、可滅的な客体に向かうのではなく、永遠であり、最善である神を客体とするものである。感謝においても変わるところはない。神に依らない隣人愛から感謝が生ずる限り、それは可滅的な客体への愛であり決して完全な人には起こりようがない。邪悪な人は可滅的な客体である。従ってたとえ完全な人の命を救ってくれた邪悪な人に対しても、感謝が生ずることはないと言わざるを得ない。

もとよりこのような状況下における感謝については仮定法による問いが続発してくるので、一々取り上げるわけには行かないが、スピノザの説く完全な人が完全であればあるほど、次の一点が感謝に関する限り決定的ともいえる重要性を帯びて問題となる。すなわち可滅的である邪悪な人に対して感謝は決して生じないにしても、神に対しては全く何も生じないのであるかと言う問いである。スピノザはこれには触れようとせず、忘恩を否定することによって答えとしている。感謝は与えられた愛の認識に基づく親切心に対する肯定的応答であり承認の情である。章立てをしてまで感謝について論じようとする姿勢を見せながら、感謝の本質について論じようとしなない。神の認識による神への愛としての感謝は変わることも滅することもない真の感謝であり、完全な人の感謝として論理的にも導くことが出来る。出来るに関わらず殆どすべての人が感謝は「善と考えていることを私はよく知っている」と断った上で、「それにもかかわらず私は、それが完全な人には決して生じ得ないことを敢えて主張する」<sup>i</sup>、とスピノザは強い口調で述べている。『短論文』において、スピノザが感謝の本質あるいは真の感謝について論及しようとしていないことは、このスピノザ自身の言明をもってしても明らかである。『短論文』の持つ感謝論の欠陥は、感謝の一面すなわち可滅的な客体に対する隣人愛のみを考察の対象として、感謝の全面に及ぼうとしないところにあり、その理由が何であるのか、

<sup>i</sup> 同上、152 ページ。

興味ある課題である。スピノザの若き日の感謝論が、後年に及んでどのように展開し熟成するのか、『エチカ』において見ることにしよう。

#### 4 『エチカ』における「感謝」の観念

スピノザの著作に関して、わが国において余りにも著名な翻訳者であり研究者である畠中尚志の解説を参考として考察を進めることとする。

『短論文』は人々の好んで言うごとく『小エチカ』の名にふさわしいものである、と評するに至った理由として、「思うに偉大なる哲学者のうちその思想発展の経路に於いて著しき変革乃至飛躍のなきことスピノザの如きはない。」と記したうえ、更に「後年の彼の思想を特徴付けるすべてのものが初めから彼の思想の中にあつたのである。」と解説者自身述べている<sup>i</sup>。したがって、『短論文』におけるスピノザの感謝論について訳者注に、好意及び感謝の定義はデカルトの定義とほぼ同じでこれを採用しているが、デカルトは感謝を美德、好意をこれに準ずるものとしているのに対し、「スピノザはその独自の主義（十二章への訳者註三及び次の十四章参照）からこれらを美德とは認めない。」<sup>ii</sup>、と言う指摘には異論の余地は認められないにしても、スピノザの思想発展のうえで著しい変革あるいは飛躍が見出せないとする立場から、次のように述べているのは一応首肯されるであろうが、感謝の観念を考察する立場からすると、重大視せざるを得ない検討の余地を残している。

「しかし『エチカ』ではかかる態度をやや緩和している(四部定理五十一、七十一)。」<sup>iii</sup>

検討に付すべき問題は「やや緩和している」の一点にある。果たして『エチカ』における感謝論はこの評価に甘んずる、というより、適切であるとして受容できるであろうか。指摘されている四部定理五十一を先ず取り上げることとする。

「好意は理性と矛盾せず、むしろそれと一致することができ、またそれから生ずることができる。」<sup>iv</sup>

その証明として、好意の定義「好意は他人に親切をなした人に対する愛である」から、働きをなすと言われる限りの精神すなわち受動ではなく能動的精神に関係していると言うことができる。言い換えると認識する限りの精神に関係するので、好意は理性と一致しそれから生ずることもできる、と言うのである。なお、スピノザはこの定理に先行している定理を引用して別の証明をしている。すなわち、四部定理三十七「徳に従うおのおの人は自己のために求める善を他の人々のためにも欲するであろう。」<sup>v</sup>、と言うのである。徳に従う人というのは理性に導かれて生活する人であり、そのような人は他人に親切をしている人を見ると自分が抱いている親切心が強化促進される。そのことによって自ら喜びを感じるとともにその喜びには親切をしている人の観念が伴われていることとなる。とりもなおさずこれは外部の原因の観念を伴った喜びすなわち愛であり、外部の原因とは他人に親切をしている人である。これは好意の定義の示すところであり、好意に関する定理は証明されたと言われる。もっとも引用した四部三十七の後半に「そして彼の有する神の認識がより大なるに従ってそれだけ多くこれを欲するであろう。」<sup>vi</sup>、とある。確かに『短論文』の表現に比すれば緩和されていると言う印象は受ける。特に神の認識を強調しているこの後半を好意の定理の証明に全く採用していない点にそれを感じる。しかし緩和されている印象、まして「やや緩和している」程度のものであろうか。さらに検討を進めることとしたい。

「自由の人々のみが相互に最も多く感謝しあう。」(四部定理七十一)<sup>vii</sup>。

『エチカ』で自由の人というのは『短論文』においては完全な人間と呼んでいた人を指すものとみなすことができるであろう。感謝は自由の人々の間で積極的

Heidelberg, 1925, Bd. II: *Ethica* IV, *Propositio* 51, p. 248.

スピノザ『エチカ』 畠中尚志訳、岩波文庫（下）、（1951）、62 ページ。

<sup>v</sup> *Eth. IV, Prop. 37, S.O. II, p. 235.*

同上『エチカ』(下), 45 ページ。

<sup>vi</sup> *Eth. IV, Prop. 51, S.O. II, p. 248.*

同上『エチカ』(下), 62 ページ。

<sup>vii</sup> *Eth. IV, Prop. 71, S.O. II, p. 263.*

同上『エチカ』(下), 219 ページ。

<sup>i</sup> 同上, 33 ページ。

<sup>ii</sup> 同上, 249 ページ。

<sup>iii</sup> 同上。

<sup>iv</sup> *Spinoza Opera*, herausgegeben von Carl Gebhardt,

に行われており高く評価されている。したがって『エチカ』における感謝はこの定理に端的に示されているように、肯定されしかも最大の評価がなされている。『短論文』における感謝と『エチカ』における感謝との相違は明白である。否定から肯定への転換である。質的な転換であり、やや緩和しているなどと言うものではない。「完全な人には決して生じ得ないことを敢えて主張する」と言われ、「隣人を神の故に愛しないときに生ずるとして」 貶められていた感謝は、ここに感謝本来の面目を取り戻したのである。

『短論文』から『エチカ』への発展、それは感謝の観念において質的転換となって現れたが、その理由は何であろうか。

もとより決定的な理由を直ちに挙げることはできないにしても決して不可能というのではない。先ず考えられることは感謝それ自体に対するスピノザの態度の変化である。『短論文』において感謝は否定的にのみ見なされていた。場合によってはスピノザの目には感謝というものは卑しいものである、として印象付けられていたのではないかと言うことである。それゆえ感謝については肯定的にみることができず、積極的な態度は当然取ることができないところから、感謝を全面的に取り上げて論及するには至らなかったものと推察される。さらに『エチカ』に即して二点取り上げ、考えてみることにする。

「神々は人間に感謝の義務を負わせ、人間から最高の尊敬を受けるためにすべてのものを人間の使用に向けるのだと信じた。」<sup>i</sup>

『エチカ』において感謝の数少ない用例のうちの一つである。第一部付録に、一般に信じられている神とスピノザの説く神との相違が対立的に明示され、論じられている。その際、重要な役割を担っていたとみなされるのが、引用した感謝の観念である。人々が神に感謝し神を崇拝するのは、神が人間の目的に合うようにすべてに及んで手段を整えて面倒を見てくれものと人々は信じているからである、とスピノザは説く。人間がはじめて神の観念を持ったとき、人間は正しい神の観念を認識することがなく、自分たちの支配者に

似せて神を想定するとともに、支配者の性情について聞き知ることがなかったので、自分の性情に基づいてこれを判断した。従って大抵の人々の抱いている神の観念は人間中心の目的論の表明であり、その根拠をなしているのが自由意志である。また人格的であり超越的存在としての神である。これに対してスピノザの神は、神即自然としての神であり、すべては神を原因として必然的に生起する。自由意志は否定され、当然非人格的であり、また内在的な神である。このようにスピノザの説く神は人々の信じている神の観念と真つ向から対立する。世人はスピノザの神を理解しようとせず、非難し危害を加えようとさえする(本稿冒頭に記した *Caute* の意味が想起されよう)。スピノザは世人の無理解は偏見より生じているとみなし、その偏見も世人の抱いている目的原因に由来していると考えた。人間が神に感謝するのはその一つの現れであり、引用した一説に見られる通りである。目的原因の根拠である自由意志は、真の原因である起生原因としての神に関する無知であり、人間を自己中心的にする。しかし、自然と神々は人々の利益に反し、様々な災害や障害を起こす。スピノザは一般の人々の神の観念を仮借なく批判する。更に重要なことは、人々は物の本性を知ろうとせず、人間中心あるいは自己中心の立場から物事を知ろうとしているに過ぎない。すなわち知性あるいは理性による認識ではなく、感覚による認識、これをスピノザは表象力による認識もしくは第一種の様式による認識と呼んでいるが<sup>ii</sup>、これによって人々は物事を認識している。感情はこの認識様式より、多くの場合生ずるが、混乱した認識に基づいているので、外部の原因に左右され、心の恒久的な安定を得ることはできない。

スピノザの感謝の観念は神に関する限り、その評価は少なくとも『エチカ』第一部においては『短論文』当時と変わりがないように見受けられる。引用文に引き継いで、すなわち神々に感謝し神々を崇拝した結果、「各人は神が自分を他の人々以上に寵愛し・全自然を自分の盲目的欲望と飽くことなき食欲の用に向けてくれるように敬神のいろいろな様式を自分の性情に基づ

<sup>i</sup> *Eth. I, Appendix, S.O. II, p.79.*

同上『エチカ』(上)、85 ページ。

<sup>ii</sup> *Eth. II, Prop.40, Schol., S.O. II, p.122.*

同上『エチカ』(上)、142-143 ページ。



いて案出した」<sup>i</sup>。その結果、偏見は迷信に墮し人々の心に深い根をおろした。「これが原因となって各人は、すべてのものについて目的原因を認識し・説明することに最大の努力を払うことになった。」目的原因が人々の意識のうちに培われて行く過程で神に対する感謝が如何に大きな役割を果たしたか、スピノザ独自の神学の研究を通して、また自らの生育環境の体験により、スピノザはこれを痛感していたことであろう。『エチカ』はスピノザ畢生の大作であり『短論文』の後を受けて数年足らずで第一部の主要部分が出来上がっていたといわれるから、『短論文』の影響がなお強く見られるということも考えられるが、第一部の付録に論じられている世俗あるいは伝統的な神の観念は、後年における『神学政治論』においても同じように扱われているので、生涯変わることがなかったものと思われる。真っ向から対立する神の思想に妥協の余地はない。世俗の域にとどまる限り、真の感謝は現れる機会を持たず、貶められ否定されねばならないのであろうか。スピノザ自身の思想の発展がこの問いに答えている。その過程においていわば概念の洗練を経て感謝は真の相を現していく。これが第二点として注目する例である。

「盲目的欲望に支配される人々が相互に示すような感謝は、多くは感謝と言うよりもむしろ取引あるいは計略(<sup>アック ビウム</sup> aucupium)である。」<sup>ii</sup>

先に引用した四部定理七十一の備考に記されている一節であるが、ここで容易に気付くことは『短論文』において、生ずるとされた感謝である。盲目的欲望と言うのは極端な場合であるにしても、神に依らない隣人愛と解することができるであろう。したがってそれは見返りを求めての感謝あるいは親切に対する応答と言うこととなる。もっとも神に依らない隣人愛の意味するところはそれに尽きるものではなく、可滅的な客体に対する愛であるから、客体のありように依存して無数の例がありうるであろうが、変わることもない恒久の真の感謝とは異なる際立った例と言えるであろう。

さらに、世俗の感謝の持つ不純性を明らかにすることによって、忘恩に新たな光を投じている。『短論文』において忘恩は貪欲あるいは過度の自己愛の結果、理性的根拠なしに生ずるものであるから完全な人間には起こり得ないとして、忘恩を全面的に否定した。『エチカ』においても、忘恩については、基本的には変わっていないが、愚かであるために応答しないのは忘恩と言われない、と言う指摘は、否定的なものを介して感謝が明らかになる例として興味深い。先に『短論文』において論じたとき、忘恩について理性的根拠の持つ問題に触れたが、『エチカ』においてこの点は明確にされている。自己あるいは社会の破滅になるような贈り物によって誘惑されない人は確固たる精神の所有者であり忘恩的とは言われないと述べている。このような指摘は極めて常識的であり哲学書においてこと改めて論ずるまでもないとする見解もあろう。強調されているのは、確固たる精神の所有者、である。『エチカ』すなわち倫理学はこの人間像を追求して著わされた。すべての人が現実に、その場に臨んでこの種の忘恩的行為がとれるとは限らないのである。スピノザの説く自由の人は、確固たる精神の所有者であるが、感謝についてなお慎重に配慮すべきことが定理として記されている。ここにおいては、真の感謝がその背景をなしていることは明らかである。定理の証明は、「各人は自己の意向に従って何が善であるかを判断する。故に誰かに親切をなした無知の人はそれを自己の意向に従って評価するであろう」<sup>iii</sup>、そのとき「より小さく評価されるのを見たとしたら悲しみを感ずるであろう」<sup>iv</sup>。これに対して「自由の人は他の人々と交友を結ぶことにはつとめるが」しかし「彼らに対して彼らの感情から判断して同等とされるような親切を報いることにはつとめないでむしろ自己ならびに他の人々を自由な理性の判断によって導こう」とする<sup>v</sup>。それは自由の人自身が「最も重要として認識する事柄のみをなそうとつとめる」からである。この点に、すなわち、感情から判断して親切

<sup>iii</sup> *Eth. IV, Prop. 70, Dem. S.O. II, p. 263.*

同上『エチカ』(下)、81 ページ。

<sup>iv</sup> *Ibid.*

同上。

<sup>v</sup> *Ibid.*

同上『エチカ』(下)、81-82 ページ。

<sup>i</sup> *Eth. I, Appendix, S.O. II, p. 79.*

同上『エチカ』(上)、85 ページ。

<sup>ii</sup> *Eth. IV, Prop. 71, Sch. S.O. II pp. 263-264.*

同上『エチカ』(下)、82-83 ページ。

に報いるのではなく、最も重要として認識する事柄のみをなす、ここにスピノザの感謝論の要がある。言うまでもなく、それはスピノザ倫理学の、つまり『エチカ』の中核である。自由の人はそれゆえ「無知の人々から憎しみを受けぬために」また「彼らの衝動にでなくたんに理性のみに従うために、彼らの親切をできるだけ避けよう」とつとめるであろう<sup>i</sup>、と証明を結んでいる。なお、慎重を期するため次ぎのような備考が添えられている。この備考における考察こそ、先の忘恩の論考のとき提出した問いに対するスピノザの回答にほかならない。問いとは、極悪の人に救助された完全な人間はどのように応答するのか、と言うのであり、『短論文』における感謝論の急所をつくものであった。完全な人はこれに答えることは出来なかった。

自由の人の答えは、証明のうちの「親切をできるだけ避けよう」とつとめるのうちにある。しかし、自分自身の一命の救助という危急の場合、この証明では答えにはならない。極悪人の親切を避けては一命を失うからである。備考を設けざるをえない理由がある。『エチカ』におけるスピノザの考察は綿密であるが、『短論文』から『エチカ』への思想の展開における成長と熟成を認めることができるようにおもわれる。備考において、スピノザは極悪人と呼ばずに自由の人と対照して無知の人々としているが、無知の人々も貴重な人間的援助をなしうるとして、「彼らから親切を受け、したがってまた彼らに対し彼らの意向に従って感謝を示すことの必要な場合がしばしば起こるのである」と指摘して、更に「親切を避けるにあたっては、我々が彼らを軽蔑するかに見えぬように、あるいは我々が食欲の故に報酬を恐れるかに見えぬように、慎重にしなければならぬ。」と注意を促し「すなわち彼らの憎しみを逃れようとして返って彼らを憤らせるようなことがあってはならぬ。」として「ゆえに親切を避けるにあたっては、何が利益であるか何が端正であるかを考慮しなければならぬ。」と結んでいる。備考ではあるが幾何学的体裁で論述しようとする姿勢は崩れていない。『短論文』においては一面的見方よりされず、積極的肯定的評価が得られず、むしろ否定的に、完全な人間には決して生じな

い悪しき感情として、悪とみなされていた感謝の観念であるが、『エチカ』においては、スピノザの理想とする自由の人により全面的視野のもとに現実感を持って綿密に考察され、感謝は感謝本来の面目を取り戻すとともに、自由の人々のみが相互に最も多く感謝しあうとして最大の評価を受けるに到った。スピノザ哲学における感謝の観念の肯定から否定への一大転換は何故起きたのか、またその意義は何であるのか、考えてみることにしたい。

## 5 スピノザ哲学における感謝の観念の位置づけ

『短論文』における感謝の観念と『エチカ』における感謝の観念との相違はスピノザ哲学発展の上から見て極めて重要な意義を有すると思われる。前者においては否定的に、後者においては積極的肯定的に論述され評価されている。この評価を分かちものとして端的に示すことができるのは両者における人間観の相違である。すなわち、『短論文』における完全な人間と『エチカ』における自由の人との相違である。完全な人間とは如何なる人間であるのか、自由の人とは如何なる人であるのか、これを端的に示しているのが両人の持つ感謝の観念である。スピノザ哲学自身のいわば内的発展を考察対象としてみた場合、重要な位置を感謝の観念が占めていると、先ず指摘することができよう。

スピノザの若き日に理想とされた完全な人間は、徹底して神に依存する人であり『短論文』における表現を持ってすれば、神の奴隷であり、神との合一に達した人が最も完全な人間であった。可滅的な客体への愛である神に依らざる隣人愛から生ずる感謝は完全な人間には無縁である。というより、むしろ悲しみの原因として悪であるとみなされる。ここにおいて強調されているのは、あくまでも神と人との関係であり、人との関係ではない。人間相互の関係は神との関わりなくしては、如何なる善行といえども、とるに足らぬものであり、それどころか悪でさえある。神に依らない感謝を完全な人間には決して生じないとして否定された感謝は、感謝を否定する忘恩に言及するに及んで、すなわち否定の否定を経て隠されていた感謝が問われるに到った。

生涯をかけて完成された『エチカ』においては「自

<sup>i</sup> Ibid.

同上『エチカ』(下)、82 ページ。

由の人々のみが相互に最も多く感謝しあう」<sup>i</sup>、とされた。自由の人々「のみ」と強調されている点に注目したい。同時に「もっとも多く」感謝しあう、という点にも。一般に感謝と呼ばれているものの応報を期待する不純な、あるいは悲しみを生じさせる感謝ではなく、真の感謝は、感情に隷属する無知の人々ではなく、理性に導かれて行動する自由の人々によってのみ実現されると説かれている。ここにおいて『エチカ』と『短論文』との明確な相違を容易に見取ることができるであろう。すなわち『エチカ』においては、人間相互の関係が主題となることによって、感謝は積極的肯定的に評価されている。神と人間との関係から人と人との関係へと哲学的思索の重点が発展的に移行していったことを示している。まさにここに倫理学が書かれねばならない必然性がある。『エチカ』と『短論文』とを分かち決定的な相違点である。『短論文』には人間相互の学としての倫理学はない<sup>ii</sup>。感謝が正当な評価をうることができなかつた大きな理由がここにあるといっても過言ではないであろう。同時にスピノザ畢生の大作『エチカ』において占める感謝の観念の重要性とその位置の高さについても、指摘することができる。これがスピノザの哲学体系において感謝の位置づけがなされる第二点である。スピノザは「神の観念を有する限りにおける我々、すなわち神を認識する限りにおける我々から起こるすべての欲望および行動を私は宗教心に期する」と述べ、更に「我々が理性の導きに従って生活することから生ずる、善行をなそうとする欲望を私は道義心と呼ぶ。」と記している。次に「理性の導きに従って生活する人間が他の人々と友情を結ぶにあたっての根底となる欲望を私は端正心と呼び、また理性の導きに従って生活する人々が賞讃するようなことを端正と呼び、これに反して友情を結ぶのに妨げとなことを非礼と呼ぶ。」<sup>iii</sup>、と述べて、人間相互の關係に触れている。これによってスピノザは国家の基礎の如何なるものであるかをも示した<sup>iv</sup>、として、倫理学は必然的に国家論

<sup>i</sup> *Eth. IV, Prop. 71, S.O. II, p. 265.*

<sup>ii</sup> 断定するには慎重を要する。後述するように『短論文』評価の要をなす。

<sup>iii</sup> *Eth. IV, Prop. 37, Sch. 1, S.O. II, p. 236.*

同上(下)、47 ページ

<sup>iv</sup> *Ibid.*

において結実することを暗示する。古代ギリシャ以来の正統な哲学の大道を行くものである。

ここで注目すべきことは宗教心と道義心とを明確に分けて論じていることである。感情の隷属から解脱して理性の導きに従って生活している自由の人々を主題としているのが、『エチカ』の第四部である。表題『エチカ』倫理学の格好の内容は、この第四部から第五部の半ばにかけて盛り尽くされているが、第四部のみを以ってしても十分であることは、スピノザ自身の明言するところである<sup>v</sup>。

スピノザの主著『エチカ』すなわちスピノザの哲学体系における感謝の位置づけを終えた今、今回の思索の機縁となった『短論文』と『エチカ』とのかかわりに着目し、拙稿を結ぶこととしよう。

『短論文』に『エチカ』と同じ比重をかけて考察し論じてきたが、この姿勢つまり前提そのものが問われなければならない。

『短論文』の発見の意義については、スピノザ哲学研究史上画期的意義をもっていることは言うまでもないが、そのことが『短論文』の過大視あるいは絶対視に連なる傾向を生ずることのないよう、慎重を要するであろう。生涯をかけて考究し訂正を重ねて、満を持して刊行しようとした『エチカ』と、口授筆記をもととして手書きされたうえ、一部は散逸していると言われる『短論文』とを、同等に扱おうとすることは、たとえ20代と言う若年の頃の作品とは言え、資料価値の面からは問うまでもないことであろう。何よりスピノザ自身はもとより、編集者と目されるイエレスにしても残そうとする意志をもっていなかった、と言われている<sup>vi</sup>。

同上。

<sup>v</sup> *Eth. V, Prop. 41, S.O. II, p. 306.*

同上(下) 135 ページ。

第三種の認識(直感的認識,直感知)に到って始めて十分と言えるのであるが、特に注目したいことは、焦点を神に置いているか、人間に置いているか、と言うことである。もとより四部定理 73 備考(毅然とした精神の人間は、一切が神の本性の必然性から生ずることを、特に念頭に置くこと)を無視するものではない。問題は絞られている焦点の置き所である。

<sup>vi</sup> 前掲『短論文』、21-22、28-29 ページ。イエレスは、『短論文』のほかに、スピノザの『蘭訳遺稿集』にも

その間の事情を、扱う際に心しておきたい。

今ひとつ指摘しておきたいことは『短論文』の性格つまり思想内容についてである。畠中が鮮明に指摘しているように、『短論文』と『エチカ』との相違は、前者が著しく受動的、神秘的、宗教的であるのに対して、後者は、能動的、合理的、倫理的である。その理由をスピノザの持っていた、人間精神の能力の思想のいわば未分化に帰している<sup>i</sup>。

この未分化状態からの発展と見るか、あるいは未熟な状態からの成熟と見るか、『短論文』と『エチカ』に関わる評価の分かれるところであろう<sup>ii</sup>。

本稿における感謝の観念の考察は、そのいずれにも属すると言うことはできず、スピノザ哲学における新たな側面を示していると言うことができるのではないであろうか。覆われていたものが頭になる、いわば顕現説ともいふべきものを思わせる。覆うということは否定を意味する。しかし真理を覆い尽くすことはできない。デカルトを徹底的に批判するスピノザではあるが<sup>iii</sup>、感謝の観念に関する限り、若年の頃には強く否定していたに拘らず、思想および人間の成熟とともに、完全にデカルトの説を容認している<sup>iv</sup>。単に容認しているに止まらず、「倫理学」を欠くデカルト哲学を越えていると見ることもできよう。

顕現説なるものを披露したが、『短論文』の扱いについて慎重でなければならない。研究書のなかには、結論を急ぎすぎるものも見出されるだけに、その感を一層深くする<sup>v</sup>。しかし、『短論文』における断定的

深く関わっている。

<sup>i</sup> 同上『短論文』、262 ページ、参照。

<sup>ii</sup> 畠中尚志、桂寿一は成熟説を取っているとみなすことができよう。畠中については本稿中『小エチカ』紹介に於いてすでに記した。桂については『スピノザの哲学』東京大学出版会、(1956)、62 ページ。

<sup>iii</sup> 顕著なのは自由意志論。デカルト道徳論の要である。否定するものと肯定するもの、両学説の厳しく対峙する所である。

<sup>iv</sup> 自由の人は『情念論』の高邁な人をおもわせる。

<sup>v</sup> 性急な対象との合一説：(清水禮子『破門の哲学』、みすず書房、(1995)、70-71 ページ)。自己中心的愛説：(工藤喜作『スピノザ』、講談社、(1979)、179 ページ、など。コレギアント派の仲間の雰囲気、また「我々はすべて斉しく幸福にあずかり得る」(『短論文』208-209

な論調と論理(完全な人間には感謝は決して生じない、神に依らない隣人愛から感謝が生ずるなど)から、それらを前提とした考察に誤りがあるとは思われない。

『短論文』によって、スピノザの思想の一面を明らかにすることができたように思う。

## 結び

スピノザの思想における感謝の観念について、特に『短論文』に注目することによって、主著『エチカ』の持つ倫理的性格が鮮明に浮き出された。また、感謝の観念は、感情論に深く関わるとともに、倫理学において高い位置を占めていることが示された。スピノザ哲学の豊かな感情論の一方は、倫理学に、他方は政治学すなわち国家論へ、と必然的に展開していく。倫理学はその重要な基礎をなすものであり、感謝もまた重要な役割を担うこととなる。

スピノザは、貧者に対する配慮は社会全体の義務であるとして、公共の福祉に言及し<sup>vi</sup>、社会政策の必要性を指摘している。個人倫理から社会哲学(国家論)への展開である。同時に、この指摘は、個人相互の間における感謝の限界を意味するものと、解することができる。すなわち、単に狭い意味における道徳的観念としての感謝を美德とするに止まらず、社会的存在としての人間を直視するスピノザの、現実意識と高い配慮を思わせる。

Caute(用心せよ)、を座右の銘としつつも、いささかも人間嫌いになることはなく、自由の人々相互による感謝的な共同体をもって、スピノザは理想国とした。

ページ)、など考慮すべきであろう。

<sup>vi</sup> *Eth. IV, Appendix, Caput 17, S. O. II, p. 271.*

前掲『エチカ』(下)、90 ページ。なお、第4部の定理40、及び訳者注15、参照。